

未

理	心	
數冊	卷數	號冊
六	一	三
學 校	縣 中	縣 賀

五
号

西洋哲學講義

井上哲次郎講述

卷三

月購	冊種	種	函冊
日入			
月	130		
	245		
	Vol. 3		
日			

井上哲次郎講述

卷三

西洋哲學講義

明治十六年四月廿七日版權免許

免許

彦立校
印章

西洋哲學講義目次
卷之三

第九回

プレート氏ノ傳

第十回

プレート氏ノ哲學ノ發達

プレート氏ノ哲學ノ方法

第十一回

プレート氏ノ哲學ノ大意

第十一回

西洋哲學講義

第一章 緒言

第二章 哲學之概論

第三章 哲學之歷史

第四章 哲學之分類

第五章 哲學之方法

第六章 哲學之原理

第七章 哲學之應用

第八章 哲學之未來

第九章 哲學之地位

第十章 哲學之價值

第十一章 哲學之意義

第十二章 哲學之精神

第十三章 哲學之理想

第十四章 哲學之實踐

第十五章 哲學之結論

西洋哲學講義目次

西洋哲學講義卷之三

井上哲次郎 講述

第九回

プレート氏ノ傳

第四十八節 プレート氏ノ本名ハアリストク
 リトスナレ氏、氏ノ額廣カリシヲ以テ、時人稱シ
 テプレートトトイヘリ、即チ廣額ノ義ナリ、父ハア
 リストント云ヒ、母ハペリクシヨネ一ノ名ハポ
 トナト云ヘル人ニテ、紀元前四百二十九年ニア
 ゼンスニ於テ氏ヲ生ム、恰モペロポシネソスノ

戰爭ト時ヲ同ウス、即チ希臘人ノ思想及ビ行爲
ノ最モ活潑ナル時代ナリ、一説ニ氏イーダナニ
於テ生ルトスルハ非ナリ、事^エシサイクロピ
テイヤ、ギリタニ^{名書}ニ詳ナリ、プ
レート氏ノ父
ハアゼニスノ貴族ヨリ出デ、母ノ先ハ亦ソロ
ン氏ニ出ヅト云フ、然ルニ後世氏ニ就テ種々附會
ノ説ヲナシ、或ハ氏ハアポロノ子ニシテ、母ハ神
女ナリト云ヒ、或ハアリストン、ベリクシヨネト
結縁セリト雖モ、アポロ夢ニ現ハレテペリクシ
ヨネハ既ニ孕メルヲ告ゲタルヲ以テ婚姻ス

スルヲ猶豫セリ、杯ト云ヘド、皆信ズルニ足ラ
ザルナリ、

プレート氏ハ幼少ノ時充分ノ教育ヲ受ケ、殊ニ
體操ニ熟達セリ、蓋シ他ノ希臘人ノ如ク頗ル體
操ヲ重シ、此ニ由テ身體ヲ練修スルヲ猶ホ辨證
ニ由テ心意ヲ練修スルガゴトクナルベシト思
惟セルナリ、然レ氏ハ偏ニ體操ニ心ヲ傾ケシ
ト云フニハアラス、詩、音樂、并ニ修辭モ亦能ク學
ビ、隨分其道ニ進メリ、詩ハ殊ニ詩史^エピック、ホ
エム^エヲ作ルヲ好ミシカド、嘗テホーメル氏ノ

詩ト比較シトテモ及フヘカラスト思ヒ、ソノ草
藁ヲ皆火中ニ投セリ、悲曲(ツレチダイ)モソクラ
チース氏ニ接スルニ及テ、皆焼却セリト云ス又
フレート氏ノ哲學ヲ學ビ始メシモ亦頗ル早カ
リシト思ハル、何トナレバ、氏ノソクラチース氏
ニ就キシハ、二十歳ノ時ニテ、ソレヨリ前ニクラ
チロス氏ニ學ビシトモアレバナリ、唯、差、怪ムベ
キハフレート氏ノ少シモ當時ノ政治ニ關係セ
ザリシトナリ、蓋シ氏ノ從弟ナルクリシヤス氏
モ氏ノ叔父ナルチヤルミデース氏モ皆政治ニ

關係セシトナレバ、氏ヲシテ時事ニ心ヲ傾ケシ
ムベキ誘因ハ種々アリシニ相違ナケレバ、氏ハ
哲學ヲ好ミ、殊ニヘラクリトス氏ノ哲學ヲ喜ビ、
公衆ニ向テ演說セシト杯ハ曾テ之アラザルナ
リ、
第四十九節
フレート氏ガ始メテソクラチー
ス氏ニ接セシハ恰モ二十歳ノ時ニテ、ソレヨリ
十年ノ間ソクラチース氏ニ就テ學ベリ、然レバ
此十年ノ間ニハ二三ノ奇話ナキニアラスト雖
モ、皆信ズベカラザル下ノミニテ、フレート氏ガ

如何ナル事ヲ大セシカ之ヲ知ルニ由ナキナリ、
ゼノフオン氏ノ「メモラビリ」書中ニプレート氏
ノ「ヲ載セタレ」是レ亦極メテ簡單ナル「ニ
テ、唯師弟ノ間ニ親密ナル交際アリキト云フ」
ヲ示スニ外ナラズ、プレート氏自ラモ其會話篇
中ニ於テソクラチース氏ニ對シテ如何ナル「
ヲナセシカ」ヲ言ハズ、但一所自己ヲソクラチー
ス氏ノ親交中ニ算入スルノミ、然レモプレート
氏が如何様ニソクラチース氏ヲ敬セシカハ略
會話篇ヲ通覽スル間ニ推察シ得ベキナリ、何ト

ナレバ、會話篇ニハソクラチース氏ヲ以テオモ
ナル人物トシテ總々テ辨論ヲ判定スル人トス
レバナリ、
第五十節、ソクラチース氏が死シタルキプレ
ート氏ハ方ニ三十歳ナリシガ、アゼンス人ノ哲
學者ニ對シテ亂暴ノ舉動ヲナサンコトヲ恐レ、共
ニソクラチース氏ニ學ビタル友人ト相伴ヒ、去
リテメガラニ至リ、ユートクリド氏ト共ニ其地ニ
住居セリ、是迄ハプレート氏モ純粹ナルソクラ
チース氏ノ徒弟ナリシカド、今ハ辨證ニ練達セ

ルメガラ學派ノ中ニ周旋セシヲ以テ之レガ爲
メニ大ニ得ル所アリシナラン、後氏ノ哲學ヲ構
成スルニ專ハラ辨證式ニ由リシヲ以テ之ヲ知
ルベキナリ、實ニブレート氏ノ會話篇ハ總ベテ
辨證ニ屬スル論說ヲ載セタル者ニテ、リユウキス
氏ガブレート氏ヲ以テ端嚴ニシテ且ツ抽象的
ノ思想家ナリト云ヒタルモ亦虛妄ニアラズ、而
シテ善クブレート氏ノ此ノ如ク辨證式ヲ用ヒ
タル所以ヲ問ヘバ、全ク其メガラ學派ニ感化セ
ラレシニ因由スト謂ハザルヲ得ザルナリ、ブレ

ート氏ハメガラヨリシリシ、埃及マダナグレシ
ア并ニシハリトニ旅行セリ、就中マダナグレシ
アニアリシ片ニ其地ニ感ナルピサゴラス學派
中ニ往來シ、之レニモ亦頗ル感化セラレタル歟
蓋シブレート氏ガ政治上ニ注目スル一ヲ欲セ
ザリシガ如キハ、ピサゴラス學派ノ風ニテ、全ク
彼レニ薰陶セラレシト見ユ、

第五十一節
ブレート氏ハ凡ソ十年間旅行ヲ
ナシ、四十歳ノ時アゼレスニ歸リシニ、多クノ徒
弟集マリ來リテ、氏ニ學バンコヲ求メシカバ、氏

アゼンスノ市外ニ小屋ヲ得、其地ニ於テ徒弟ヲ
教導スルヲ始メタリ、傳ヘ言フ所ニ據レバ、其
地ニハ園林モアリ、體操場モアリテ頗ル瀟洒ナ
リキ、然ルニ氏ノ住居セシ所ハ「アカデミア」ト稱
スル學問所ナルヲ以テ「アカデミア」派ト云フモ
ノモアリ、實ニ氏ノ住居セシ所ハ後世ノ人ヲシ
テ種々ノ想像ヲ生ゼシムルヲ以テ、詩人モ哲學
者モ之ヲ讚美スルニ至レリ、即チ其「橘柚成林、綠
陰深、長夏不斷鳴幽禽、有時蜜蜂也、報衙紛飛更鬧
爲微吟、先生平生在于此、獨講哲學萬古心」ト云フ

ノ類、ブレトト氏ノ住居セシ所ヲ想見シテ言ヘ
ルナリ、
ブレトト氏ノ講義ハ會話篇ヲ讀デモ知ルベキ
カ如ク、辨證式ヲ用フルヲ嚴密ニシテ、初學ノ者
ハ隨分之ヲ了解スルニ苦シミシナルベシ、或ハ
云フ、學問所ノ戸ニ唯、幾何學者ノミ此内ニ入ル
ベシト題セルモノアリト、然レモ是レ氏ノ講義
ノ極メテ精核ナルヨリ起リシ說話ナルベシ、實
際此事アリシヤ否ヤハ未ダ知ルベカラザルナ
リ、

プレート氏ハ徒弟ヨリ一定ノ束脩ヲ取ラザレ
氏、ダイオニシオスダイオン等ノ如キ富家ヨリ
贈物ヲ齎ス成ハ之ヲ受クルニ猶豫スルナカ
リキ、エフツポスアンチフェニース等ノ如キ詩人
ノ記スル所ニ據レバ、プレート氏ノ徒弟ニシテ
學問所ニアルモノハ皆行狀端正ニシテ、衣服ヲ
裝飾シ、加フルニ綺麗ナル帽子ト笈トヲ以テセ
リト、是レヲ彼ノツクラチース氏ノ徒弟ガ汚穢
ナル衣服ヲ着タルニ比スレバ、大ニ異ナル所ア
ルヲ見ル、而シテ又プレート氏ノ徒弟ハ富家ノ

子ニシテ、假令ヒ其師ハ謝禮ヲ要求セザレ氏、定
メテ貴重ナル贈物ヲナセシナルベシト思ハル
ルナリ、又氏ノ徒弟トナルニハ若干ノ事情ヲ要
セシト見エ、熱心ニシテ後來望アルモノト雖モ
或ハ許容セラレザルナキ之ヲ要スルニ
プレート氏ノ教授ノ法ハツクラチース氏ト大
ニ相異ナレリ、ツクラチース氏ハ街頭ニ於テ公
衆ニ向ヒテ談話セシキ、プレート氏ハ少シモ左
様ノトヲナサズ、市外ニアル自己ノ園宅ニ於テ
徒弟ニノミ教授セリ、シユウゲレル氏ガ云ヘル

如ク哲學ガ既ニ一種ノ體系(システム)ヲ成スニ
及デ、體系ハ哲學ニ必要ナルモノトナリ、隨ヒテ
又哲學ヲ修ムルニハ先ヅ他ノ科學ヲ預備トシ
テ修メザルベカラザルトナル、是ニ於テカ哲
學ハ稍、秘教(エソトリック)ノ性質ヲ帶ブルニ至
レリ、然レモ世人ノ哲學者ヲ尊敬スルハ以前
ト異ナルトナカリキト見エ、他邦ヨリプレート
氏ニ法典ヲ作ラントテ請ヒシト往々コレアリ
ト云ヒ、又氏ハ實ニ之ヲ作りシト屢コレアリト
云フ、

第五十二節 プレート氏ガ教授ヲ始メシヨリ
後ニハ再ビシ、リトニ旅行セシトアリ、是レヨ
リサキ氏ガシ、リトニ行キシモハダイオニ
シオス第一世ガ虚政ヲ行フ頃ナリシガ、二度目
ニ行キシモハダイオニシオス第三世位ニ在
リテダイオン氏ト共ニ頗ル善ク待遇セリ、蓋シ
プレート氏ハ自ラ政治家ニナラント思ヒシニ
ハアラザレモ、自己ノ有スル所ノ理想ヲ如キ國
體ヲ實際ニ組成セントスルノ心アルヲ以テ、此
ノ時ヲ好機會トシ、自ラ作為セル所ノ法律ヲ用

ヒテ、一ノ殖民地ヲ治理セシトテ希望セシニ、王
乃チ殖民地ヲ與ヘシトテ諾セシト雖モ、未ダ之
ヲ與ヘザルニ、王其親戚ナルダイオシト不和
ヲ生ジ、且ツプレイト氏ノ端嚴ナル說話モ厭フ
ガ如キ状態ナリシカバ、プレイト氏ハ復タ歸郷
セリ、此ノ時若シプレイト氏ノ言フ所ヲ實際ニ
行ハシメシナラバ、實ニチェレル氏ガ云ヘル如ク
其影響ハ極メテ重大ニシテ、帝ニシラキユース
ハミナラズ、全シトリト并ニマクナ、ダレシアニ
モ及ブス、希臘中ハ皆之レガ爲メニ感化セラ

レタルヲラント思ハルトナリ、其後プレイト氏
ガシ、トリト行キタルハ、全ク王トダイオシ氏
トノ不和ヲ解カン爲メナル也、危キトニ遭遇シ
テ歸郷シ、ソレヨリ以後ハ政治上ニ關係スルノ
念ヲ絶チ、紀元前三百四十七年ニ婚姻ヲ締メ於
テ、或ハ物ヲ記スル也、云フ眠ムルガ如ク逝去
セリト云フ、是レヨリサキ氏ガシラキユースニ
タル也、氏ノ徒弟中或ハ氏ノ旅行ヲ喜バズシテ
別ニ學校ヲ起サント企圖セシ者アリシカド、氏
ノ友人ナルイフェクラチトスチヤブリヤスノニ

氏ニヨリテ抗拒セラレテ止ミタリ、然ルニアリ
ストトトル氏モ其中ノ一人ナリシカバ、プレ
ト氏ハコレヨリアリストトトル氏ヲ忌嫌シ、ア
リストトトル氏ハプレト氏ニ對シテ恩ヲ思
ハザリシ杯ト云ヘド、他所ニ學問スル所ヲ得ン
トシタル位ノトナラバ、是レ元ト深ク咎ムルニ
足ラザルコトナリ、

第五十三節 プレト氏ハ性太ダ憂鬱ナル人
ニテ、其廣キ額モ皺多クシテ哀情ヲ帶ビ、又其強
大ナル肩ハ高ク聳ヘタリ、故ニ氏ヲ欽慕スルモ

ノハ或ハ肩ヲ聳ヤカシテ氏ニ肖似セリト云フ、
氏ハ又決シテ笑ハザリキ、故ヲ以テプレト氏
ノ如ク鬱閉スト云フコトハ後ノ諺トナルニ至レ
リ、又多ク氏ヲ欽仰スル人アリシカド、氏ノ友人
トテハ殆ドナカリキ、然レモプレト氏オモヘラ
ク、古ニアリテハブレト氏ヲ讒毀スルモノ往
々コレアリテ、或ハ其徒弟ヲ遇スルニ親切ナラ
ザリシコトアリト云ヒ、或ハ他人ヲ責讓シテ自愛
スルノ情アリキト云ヒ、或ハ快樂ヲ好ミタリト
云ヒ、或ハ貪欲ナリキト云ヒ、或ハ虐王ニ佞媚セ

シト云ヒ、其他種々ノコヲ云ヘド、皆其實ナキコ
ニテ、全ク假造ニ出デタルコトナルベシト、チエレル
氏ノ言或ハ是ナラン、總ジテ豪傑ノ士ハ小人ノ
爲メニ妨害セラル、ト多キモノナレバ、ブレ
ト氏ヲ誹謗スルノモ、或ハ氏ヲ誣陷スルノ意ニ
出デタルヤモ知ルベカラザルナリ、

第十回

ブレト氏ノ哲學ノ發達

第五十四節
ブレト氏ノ哲學ハ一時ニ一種
ノ體系ヲ成セシ者ニアラズシテ、種々ノ事變ニ

遭遇スルニ隨ヒテ漸次ニ發達セシ者ナリ、故ニ
今傳フル所ノ會話篇ブレト氏ノ畫ノ如キモ
前後矛盾スル所往々コレアリテ、讀者ヲシテ氏
ノ真意ヲ得ルニ苦マシムルコトナキニアラズ、然
レ氏會話篇ハ元ト一時ニ成リシ者ニアラズシ
テ、氏ノ哲學ノ變遷スル毎ニ篇ヲ續テ現今ノ如
クナリタルナリ、況シテ會話篇中ニハ後人ノ竄
入モアリト云ヘバ、會話篇ニ據テブレト氏ノ
哲學ヲ知ラントスルニハ、先ツ會話篇ノコヲ詳
論スベキナリ、然レ氏グロトトチェルリユウキス

等ノ諸氏ガ論スル所各同ジカラズシテ、異說紛々、其適從スベキ所ヲ知ラズ、且ツ會話篇ノ一ヲ詳論スルモ、其事煩瑣ナルガ故ニ、徒ニ諸君ヲシテ困倦セシムルノ恐レアルヲ以テ、今シユウダニル氏ニ從ヒ、フレイトト氏ノ哲學ノ發達并ニ會話篇ノ一ヲ略論セントス、

第五十五節 フレイトト氏ノ哲學ハ學習期(レールヤール)旅行期(ワシデルヤール)教授期(マイステルヤール)ノ三期ニ分チテ論ズベキナリ、然ルニ此ノ三期ハ抑、如何ナル點ニ於テ相同ジカラ

ザルカト問フニ、第一期ハソクラチトス氏ニ本キ、第二期ハヘラクリトス氏ト云リテ學派トニ據リ、第三期ハピサゴラス學派ニ淵源ス、猶ホ又其旨意ト異ナル所如何ト問フニ、第一期ハ倫理的、第二期ハ辨證的、第三期ハ體系的ナリト謂フヤシ、

第一期ニハプレートト氏ハ專ラソクラチトス氏ノ哲學ヲ沿襲シ、其方法并ニ其實料ヲ適用スル一ヲ主トシ、ソクラチトス氏ヨリ以前ノ哲學ヲ推究スル一ハ甚ダ好マズシテ、一意唯、其師ニ倣

ハシトヲ務メタリ、而シテ又其着眼スル所ハ同
門ノ諸友ト同ジク實際上ノ智識ニアリテ、ソク
ラチトス氏ノ如ク當時流行セル詭辯ノ類ヲ矯
正セントセリ、然レ氏之ヲ要スルニ、氏ハ第一期
中ニハ善ハ客觀上實在スルモノナリト云フ絶
對主義、アブソリュート、プリンシプルヲ確定セ
シトテ主トセリト謂フベキナリ、然レ氏若シ或
ル人ノ説ノ如ク「アヒトドロ」篇ヲシテ「プレ
ト」氏ノ最初ノ作ナラシメバ、上來述ブル所モ一
味抹殺セザルヲ得ズ、何トナレバ「アヒトドロ」

篇ニハ精神ノ生前ニ存在セシト并ニ其定期ヲ
以テ移住スルノ等ヲイフ、是レ皆ピサゴラス學
派ニ本ク「ト」ニテ、ソク「ラチト」ス氏ニハ絶エテ無
キ「ト」ナレバナリ、然レ氏「アヒトドロ」篇ハ「プレ
ト」氏ガ最初ノ作ニアラザルベシト思フ「ト」モ
アリ、且ツ第一期中氏ガ「チャルミデ」トス「篇」ニ於
テ廉節ヲ論ジ「リ」シ「ト」篇ニ於テ友愛ヲ論ジ「ラ」チ
エ「ト」篇ニ於テ亮直ヲ論ジ「ア」ロ「ト」ゴ「ラ」ス「ゴ」ル「ギ
ヤ」ス「ノ」兩篇ニ於テ詭辯家ヲ攻撃セルヲ以テ之
ヲ觀レバ矢張第一期ハソク「ラチト」ス氏ニ本ク

ト謂フベキナリ、一賦ハ、ミヤヒノミヤヒノミヤヒノミヤヒノ本ハ
第一期卽チウクラチホス氏ノ哲學ヲ沿襲スル
クニ於テブレトト氏ノ哲學ハ練熟シテエリア
并ニヒサゴラス學派ノ範疇カテゴリ出スヲ傳
受スベキ預備ヲナセリソレヨリ又此等範疇ノ
助ヲ得テ一層高尚ナル哲學ノ問題ヲ解釋シ、且
ツソクラチホス氏ノ哲學ヲシテ日常ノ間ニ限
ラザラシメントスルニ至レリ、是レ實ニ第二期
中ノ傾向ニ屬ス、サマトマ長ノ書ニヤロモ
第五十六節、第二期ニハブレトト氏ハ辨證式

ニ由テ觀念論ヲ構成シ、ハラクリトス氏并ニエ
リア學派ノ思想ヲ併セ用ヒタリ、抑氏ガメガラ
ニ旅行セシ片反對論者ニ遭遇セシガ如キ伊太
利ニ至リシ片種々ノ哲學派ニ邂逅セシガ如キ
ハ實ニ氏ニ古代ノ哲學ヲ學ブベキ機會ヲ與ヘ
タリト謂フベシ、氏亦此ノ機會ヲ得テ古代ノ哲
學ヲ學ビ、遂ニ唯道德ノミヲ講究スルガ如キ狹
隘ノ所爲ヲナスコヲ屑シトセテ、舊來ノ圈套ヲ
脱シテ、更ニ智識ノ基本ヲ推究シ以テウクラチ
ホス氏ノ哲學ヲ大成センコヲ企圖セリ、蓋シ氏

ハ凡ソ人類ハ智識ニ由ルモノナリ然ルニ智識ハ亦一トシテ總念ノトシヨシニ由ラザルナシト云フトヨソクヲチトス氏ノ哲學ヨリ抽出シ來リシナラン然レモ能ク此ノ意ヲ論定スルニハ全クメガラ學派ノ辨證式ヲ用ヒタリ即チ「トテトス」篇ニ於テ智識ハ總テ相對ナリト云フ說ヲ論破シ「ソフセス」篇ニ於テ無有(ノンビイ)ンダノ總念ヲ尋究シ「バルメニデイトス」篇ニ於テ實在(ビイ)ンダノ總念ヲ究察スルガ如キ皆辨證式ヲ用ヒテ觀念ノ客觀上實在スルヲ說明ス

スルニ外ナラズ然レモ其イハユル無有ハヘラタリトス氏ニ本キ實在ハエリア學派ニ本ク故ニ第二期ハ「ソフセス」氏トエリア學派トニ淵源スト謂フベシ其イハユル無有ハヘラ第五十七節「第三期」ハ「トス」氏ガ郷里ニ歸リ來リシキヨリ始マリ第一期ノ完全ナル體形ト第二期ノ深遠ナル實料トヲ合一スルモノナリ思ふニ氏ガ旅行中ニハ種々ノ經驗ヲ積ミ殊ニヒサゴラス學派ノ人ト接スルヲ得テ大ニ物象并ニ理想ヲ腦中ニ蓄藏セシナラン然レモ亦

西洋哲學講義 卷之三 十五

幼年ノ時ノ事ヲモ回想シテ忘ル、コト能ハザ
リキト見エ、氏カ第三期中ニ作爲セシ所ノ諸篇
ニハ最モソクテチース氏ヲ欽慕スルノ情ヲ表
ス、嘗ニ其理論ヲ讚美スルノミナラズ、又其人
ヲ理想中ニ想見スルニ至レ、以テ第三期ノ
第二第二ノ兩期ニ異ナル所ハヒサゴラス學派
ニ感化セラレテ怪異ナルトニ論及シ、且ツ觀念
論ヲ實際心理倫理并ニ格物學ニ應用セシトス
ルニアリ、然レモ唯觀念ノミ客觀上實在スルモ
ハニテ、其他覺官ニ由テ知ルベキ諸現象ハ皆觀

念ノ寫影ニ過ギザルノミト思惟シ、其果シテ然
ルヤ否ヤハ論究セズ、總テ此等ノコトハ已ニ證明
セラレタルモノニシテ、各科學ノ基址ナリト假
定シ、遂ニ是迄偏用シ來リタルソクテチース氏
ノ倫理學、エリア學派ノ辨證式并ニヒサゴラス
學派ノ物理學ヲ併セ用ヒテ一種ノ整備セル哲
學ヲ構造セントセリ、總テ此等ノコトハ夫ノ「スピ
ドロ」シムボトシオ「スピード」スレボス「レポ
リ」チミオ「ス」諸篇ニ於テ證スベキナリ、
卷五十一プレート氏ノ哲學ノ方法

西洋哲學史 卷之三 十六

第五十八節 アリストトトル氏謂ヘルアリ、曰
久凡ソ科學ヲ研究セントスルニ當テ第一ニ要
スル所ハ解釋スルニ困難ナル諸點ヲ舉グルニ
アリ、然ルニ其困難ナル諸點トハ何ヲ謂フヤト
問フニ、是レ他ナシ、古來ノ哲學者ガ互ニ相背反
シテ同一点ニ嚮向スルコト能ハザル所ナリ、而シ
テ之ヲ解釋スルノ法ハ亦其困難ナル諸點ヲ分
疏スルニアル耳、(中略)然ルニ吾輩ハ總テ古來相
背反セル諸說ヲ聞クコトヲ得ルガ故ニ之ヲ判斷
スルニ最モ便利ナル位置ヲ占ムルモノト謂ハ

ザルヲ得ズト、善哉言ヤ、ソクラチトス氏モアレ
トト氏モ皆此ニ見ル所アリシニヤ、古來ノ疑問
ヲ舉ゲテ嚴密ニ之ヲ考試スルコトヲ務メタリ、猶
ホ委シク之ヲ言ヘバ、一層一層ニ疑ヲ起シ來リ
テ反面ヨリ反對論者ヲ攻撃スルノ法ヲ用ヒテ
討論ヲナスコトヲ主トセリ、而シテ總テ此等ノ討
論ハ反對論者ヲシテ其不學無識ナルヲ覺知セ
シムルニ止マリ、此ニ由テ新ニ斷言ヲ抽出スル
モノニアラザルナリ、假令ヒストラシロス氏ニ從
テプレートト氏ノ會話篇ヲ尋繹的ト叙述的トノ

二種ニ分ツモ、矢張反面ノ論法(ネゲートイヴ)口ヲ
ク多キニ居ルト謂フヘシ、假令ヒ又然ラズトス
ルモ尋繹的ノ諸篇ニアリテハ固ヨリ破壊スル
ト多クシテ構造スルト少シト斷言スベキナリ
クロート氏ニ據ルニ、今ノ學者ハ能ク此ノ事ヲ
體認シテ公平ニプレート氏ノ哲學ヲ論ズベキ
ナリ、又プレート氏ノ哲學ヲ講ズルニ當テ結末
ニ達セントシテ進メバ進ムホド結末モ亦退歩
シテ遂ニ之ニ達スベカラザレバ、自由ニ討論シ
テ心意ヲ練熟スルトハ假令ヒ此ニ由テ他ノ目

途ニ達スルトナキモ、唯其事ノミニテ貴重スル
ニ足ルト云フコトヲ領會セサルベカラズ、實ニ會
話篇ヲ取テ之ヲ讀ムハ、種々ノ相背反セル論
說アルヲ見ル、然レモ結末ヲ求ムルガ如クニシ
テ遂ニ結末ニ達セサルモノ多キニ居ル、是レ蓋
シ他人ヲシテ自ラ思慮セシムルノ法ニ過ギガ
ルナリ、故ニ一タヒ結末ニ達セズシテ因迷シ、為
メニ再ビ其事ヲ思慮スルトヲ嫌フ者ノ如キハ、
ソクヲチーヌ氏之ヲ賤視シテ懶惰且ツ蠢愚ナ
リトセリ、蓋シソクヲチーヌ氏モプレート氏モ

俱ニ眞理ヲ尋繹スルヲ以テ終身ノ大事業ト
ナセシナリ、
プレートト氏ノ哲學ヲ講スルニ當テ今一ヶ條注
意スベキトアリ、何ゾヤ、吾輩ハ先ヅ氏ガ其談話
ニヨリテ達セントスルノ目途ヲ如何様ニ思念
セシカヲ察セザルベカラズ、蓋シ氏ハ知識即チ
認識ト稱スベキ心意ノ状態ヲ目途トシ、而シテ
此ノ目途タルヤ、心意ノ能ク觀念ヲ印シ、ソレト
親密ノ關係ヲ有スルニ至テ、始メテ達シ得ベキ
ナリ、然ルニ今茲ニ一人アラシニ、其一人果シテ

既ニ此ノ目途ニ達セルヤ否ヤヲ檢査スル法ハ、
其人能ク他人ニ向テ總テ其知ル所ヲ語ケ、其中
ヨリ又他人ノ知ル所ヲ除キ得ルカ、即チ餘蘊ナ
ク又失誤ナク問答ヲナシ得ルカ、語ヲ換ヘテ之
ヲ言ヘバ、ソクヲチトス氏ガナセシ如ク、自家撞
着ノ失ナク、能ク他人ニ詰問シ、又能ク之ニ答ヘ
得ルカヲ察スルニアリ、若シ其人之ヲ能クスル
ルカハ、プレートト氏ノ意ニテ始メテ智識ヲ得タ
ルモノト稱スベシ、此ノ如キワケユヘ、プレートト
氏ノ哲學ニアリテハ智識ハ説明ヤ教訓ニヨリ

テ得ラルベキモノニアラズシテ、自ラ種々ノ反
對論ヲ學ビ、自在ニ之ヲ攻撃シ、又之ニ應答スル
ノ法ヲ知り得テ始メテ知識ヲ得タリト謂フベ
キナリ、蓋シプレート氏ハ是レ頗ル勉強力ヲ要
スト雖モ、然レモ達シ得ベキコトナリト思惟スレ
ト、實際此ノ如キ知識ヲ得ンコトハ殆ド望ムベカ
ラザル所ナリ、假令ヒ之ヲ得ベシトスルモ、プレ
ート氏ガ會話篇ノ如ク極メテ繁雜ニシテ又連
續セル辨論ヲ用フルニアラザレバ能ハザルナ
リ、之ヲ要スルニ、プレート氏ノ哲學ノ方法ハ氏

カチシタル成效ヲ追求シテ之ヲ叙述シタルモ
トト全ク相符合スト謂フベキナリ、
第五十九節 プレート氏ガ哲學ノ方法ハ客觀
的ノモノニテ、又其標準ハ自己ノ有スル合理的
ノ概念ヲシヨナル、コンセプションニ過ギズ、
然ルニ如何様ニシテ此ノ如キ合理的ノ概念ヲ
得シカ、又此等ノ概念ハ果シテ合理的ノモノナ
ルヤ否ヤト云フコトハ氏始メヨリ之ヲ論定セズ
シテ、フヒード篇ニ於テ余ガ最良ナリト思惟ス
ル所ヲ臆想說ハイボセシスヲ列シ、原因及ビ其

他ノ事ニ於テ之ト契合スルモノヲ盡ク真理ト見做スナリト云ヒ、別ニ真理ノ標準ヲ定ムルヲ試ミズ、而シテ其惡ヲ爲ス者ハ惡ヲ受クル者ヨリ不幸ナリト論證スル片ニモ、何が善ニシテ何が惡ナルヤト云フコトハ絶エテ論究スルコトナク、但善惡トモニ自己ノ有スル或ル概念ト對合ストスルニ止マルナリ、
ブレート氏ハ觀念ハ事物ヨリサキニ事物ヲ離レテ存在スルモノト思惟セルガ故ニ善惡ノ如キモ、實際如何ナルコトガ善ニシテ如何ナルコトガ

惡ナリト云フコトヲ確定セズ、唯自己ノ有スル概念ニ配當シテ、此レハ善ナリ、彼レハ惡ナリト論斷スルナリ、又大小ノ如キモ、之ト同ジク、我レ既ニ其觀念ヲ有シ、凡ソ物ノ大小ハ之ヲ我レノ觀念ニ配當シテ後始メテ覺知スルヲ得ルモノトセリ、故ニ曰ク、若シ茲ニ人アリテ余ニ此人ノ頭ハ彼人ヨリ大ナリ、彼人ノ頭ハ此人ヨリ小ナリト言フ片ハ、余ハソノ言ヲ以テ然リトセズ、凡ソ大ナルモノハ大ナル觀念ニヨリテ大トスベク、小ナルモノハ小ナル觀念ニヨリテ小トスベシ

ト云フ自家ノ説ニ就テソノ非ナルヲ論ゼント
ス、若シ夫レ然ラズシテ直ニ他ノ言ヲ然リトセ
バ、同ジ頭ニヨリテ此人ハ大ナリ、彼人ハ小ナリ
トシ、小ナル頭ヲ以テ人ノ大小ヲ定メ、且ツ此人
ハ小ナル頭ニヨリ大ナリト想像スルガ如キ矛盾
盾ヲ來タスヲ免レザルナリ、

第六十節 前節ニ述ブル所ヨリ推論スレバ
プレト氏ハ臆想説ヲ以テ議論ノ根據トナセル
モノト謂ハザルヲ得ズ、猶ホ又「フヒード」篇ニ據
テ之ヲ考フルニ、プレト氏ガ反對論者ニ應ズ

ルノ語アリ、其略ニ云ク、若シ茲ニ人アリテ余ガ
臆想説ヲ非議セバ、余ハ之ニ答フルヲ欲セズ、但
コノ臆想説ヨリ生ズル諸件ノ相契合スルヤ否
ヤヲ檢視セントス、然ルニ若シコノ臆想説ノ如
何ヲ問フモノアラバ更ニ又他ノ臆想説ノ最モ
善キモノニヨリテ之ヲ説明シ、遂ニ満足スルニ
至テ止マントスト、是レ寔ニ不充分ナル哲學ノ
方法ナリ、何トナレバ、氏ガ最モ善キモノトハ何
ニヨリテ之ヲ定ムルカ、但、自己ノ心中ニ善ナル
觀念アリテ之ニ合當スルモノヲ善トシ、然ラザ

ルヲ然ラズトスルノミニテ之ヲ除テ別ニ善惡
ヲ定ムベキ標準ヲ求メザルナリ然レモプレ
ト氏ハ一ノ臆想說ヲ説明スルニソレヨリ一層
高大ナル臆想說ヲ以テシテ次第ニ上進シ遂ニ
復タ疑ヲ容ルベカラザル自明ノ理ニ達セント
欲スルモノニテ詭辨家ノ如ク人ノ智識ハ唯彼
ルト此レトヲ相比較スルニ止マルトセズシテ
純全ナル眞理ハ發見スベキモノナリトセリ然
レモ氏ハ歳ヲ經ルニ從テ漸次ニ此ニ注意スル
ニ至レルナリ即チ氏ガ「フヒード」篇ヲ草スル所

ニハ此ニ注意セズシテ觀念論ヲ以テ唯一ノ臆
想說ト見做スニ止マリシガ「ポブリツク」篇ニ
ハ臆想說ハ何レモ第一主義ノ境界ニ進ムベキ
階梯ニ過ギズトセリ而シテ「チミアオス」篇ニハ觀
念ニ關スル諸命題（「ロホジ」ヨニス）ハ疑ヲメ
キニアラザレモ感覺（「セニス」）ニ關スル諸命題ハ
其感覺ニ關スル度ニ從テ憑信ヲ欠クモノナリ
之ヲ要スルニ感覺ニ關スル諸命題ハ最モ信ズ
ベキモノト雖モ或ハ然ラントイフベキニ止マ
ル之ニ反シテ普通命題ハ直ニ覺知スベキモノ

ニテ之ヲ原理(フライマリ)トツルトスト稱スル
モ亦不可ナキナリトセリ、
カント氏曰ク、稀薄ナル空氣ニ翔ル所ノ鳩、ソノ
抗拒力ニ感ジテ空氣ナキ空間ニアラバ一層速
ニ飛揚スルヲ得ベシト思フナルベシ、ブレイト
氏ハ恰モ之ト同ジク、感覺ニヨリテ得ベキ智識
ノ精確ナリ難キヲ以テ感覺ノ境界ヲ離レ、純粹
ナル知力ニ屬スル虚空中ニ入りテ好結果ヲ得
ントスルナリト、評シ得テ甚ダ好シト謂フベシ、
第六十一節 既ニ第三十三節ニ述ベタルガ如

クソクヲチーヌ氏ハ歸納推理即チ比考推理、及
ビ定義ヲ用ヒテ、究察ヲ大セリ、然レ氏何レモ完
全ノモノニアラザリシカバ、ブレイト氏ハ之ヲ
大成セントヲ試ミタリ、抑、定義ハ哲學ノ基址ト
モ稱スベキホド重要ノモノニテ、凡ソ事物ヲ知
ラント欲セバ、其知ラント欲スル所ノ事物ニア
ラザルモノヲモ併セテ知ラザルベカラズ、是ヲ
以テソクヲチーヌ氏ハ產婆ノ術ヲ用ヒ、歸納推
理ニヨリテ定義ヲ抽出セリ、而シテブレイト氏
モ矢張之ト同一ノ術ヲ用ヒタリ、然レ氏亦之ニ

加フルニ分解法アナリシス及ビ總合法(シ)ンセ
シス并ニ概括法(セ)ネラリゼトシヨシ及ビ彙類
法(ク)ラシフヒケルシヨシヲ以テセリ、是レ氏ノ
大ニ哲學上ニ功アル所以ナリ、
分解法ハプレート氏ガ始メテ哲學上ニ應用セ
シ所ニテ全部ヲ各部分ニ分チ、各部分ヲ檢視シ
テ全部ノ觀念ヲ正シク確定スルヲナリ、故ニプ
レート氏ハ之ヲ分殊ニ於テ理一ヲ見ルノ法ト
セリ、之ヲ例セバ道德ト云フヲ一ヲ説明センニハ
道德ヲ其各部分即チ各種ノ道德ニ分チ、充分之

ヲ檢視シテ、始メテ分明ナル道德ノ觀念ヲ得ベ
キナリ、總合法ハ之ニ反シテ理一ニ於テ分殊ヲ
見ルヲナリ、蓋シ分殊中ニ理一ヲ求メ、理一中ニ
分殊ヲ求ムルヲ、即チ大類ヲ小類ニ分チ、小類ヲ
合シテ大類トナスヲハグロート氏ガ信スル如
ク、當時ニアリテハ肝要ナル進歩ト謂フベシ、概
括法ハ異中ニ同ヲ認ムルヲニシテ、彙類法ハ同
中ニ異ヲ認ルヲナレバ分解總合ノ二法ト共ニ
哲學ニ欠クベカラザル所ナリ、實ニプレート氏
ガ此等諸法ノ哲學ニ必須ナルヲニ心付カザリ

シナラバ、今日ノ學問モ此ノ如ク盛ナルニ至ラ
ザリシナルベシト思ハル、ナリ

第十一回

プレトト氏ノ哲學ノ大意

第六十二節 プレトト氏ノ哲學ハ觀念論ヲ以
テ主トナス、抑氏ノ觀念論ハソクラチース氏ノ
概念ヲ得ルノ法ヘラクリトス氏ノ轉化ノ說、并
ニエリア學派ノ實在論ヲ折衷シタモノナリ、即
チブレトト氏ガ事物ハ概念ニヨリテ知ルベシ
トノ意ハソクラチース氏ニ本キ、感覺ノ境界ニ

ハ轉化アリトノ意ハヘラクリトス氏ニ本キ、純
全ナル實在ノ境界アリトノ意ハエリア學派ニ
本クナリ、今ソフヒス卜「バルメニ」ディー」ス」ノ兩篇
ニ據テプレトト氏ガ如何ナル點ヨリ觀念論ヲ
立テタルヤヲ見シニ、既ニ第十四節ニ述ベタル
ガ如ク、エリア學派ノ人ハ其見ル所ノ分殊、即チ
轉化ハ實在ニアラストシテ一切感覺ニ關スル
智識ヲ取ラザルナリ、然レ氏此說ハ分明ニ矛盾
スルモノナリ、何トナレバ、分殊ヲ以テ無有トス
レ氏、其概念中ニ存在スルコトハ矢張之ヲ承認ス

レバナナリ、プレトト氏既ニコノ矛盾ニ注意シ、若シ、實在ニアラザル者即チ無有ハ思惟スベカラズトスレバ人ノ左様ノモノヲ認識スルハ到底爲シ得ベキニアラズ、隨テ又實在ニアラザル者即チ無有ト云フガ如キ智識モアルベカラザルヲ論ジ、又無有ノ存在ヲ肯定スル者モ否定スル者モ俱ニ自家撞着ヲ來タスヲ免レザルガ故ニ無有ノトニ就テ說ヲ立ツルハ極メテ困難ナルヲナリ、實ニ無有ハ唯一ナリトモ數多ナリトモ思惟スベカラザレ氏、苟モ之ヲ言フハ

矢張唯一トカ數多トカ言ハ其此ハカク又茲ニ虚說アリトセバ、即チ之ヲ無有ト概念トセザルヲ得ズ、何トナレバ、無有ヲ實在ト云ルカ、若クハ實在ヲ無有トスルカ、兩者ノ一ヲ虚說トスルナレバナリ、約シテ之ヲ言ハ、若シ實ニ茲ニ虚說即チ誤レル概念アラバ、亦實ニ無有アリト言フベキナリト論ゼリ、此ノ如クプレトト氏ハ無有ハ實在ナルヲ論旨、次テ無有ト實在トノ關係即チ總概念ノ關係及ビ結合(コムビネトシヨシ)并ニ對比(アンチセシス)ニ論及ス、其說ニ、若シ無

有ガ實在ヨリモ少ク實在セズ、又實在ガ無有ヨ
リモ多ク實在セズ、即チ非大モ大ト同シク實在
ニ屬スルナラバ、如何ナル概念モ皆對比ノ一ニ
過ギズシテ同時ニ實在トモ無有トモ見做スベ
キナリ、即チ一ノ概念ヲ舉ゲテ之ヲ言ヘバ、概念
ソノモノニ對シテハ之ヲ實在トスベク、概念ソ
ノモノト同一ナリトスベク、然レモ他ノ諸概念
ハ之ト異ナルガ故ニ絶エテ之ト普通ノ性ヲ有
スルナシ、是ヲ以テ此等諸概念ニ對シテハ之ヲ
無有トスベキナリ、此ノ如ク異同ノ概念ヲ生ズ

ルハ即チ對比ノ通式ニシテ、又其相互ノ關係ハ
實ニ辨證式ノ基址トナルモノナリ、之ヲ要スル
ニ、上來陳述スルノ意ハ實在ハ無有ナケレバナ
クナリ、無有モ亦實在ナケレバナルト云フニ
アリ、之ヲ今日ノ語ニ換フレバ、否定ハ無有ノ義
ニアラズシテ、確定ノ義ナリ、之ニ反シテ總ジテ
確定即チ肯定ハ亦否定ニヨリテ之ヲ言フベキ
モノナリ、即チ矛盾ノ概念ハ哲學方法ノ精神ナ
リト知ルベキナリ、

第六十三節 プレトト氏ハ猶ホ委シク此意ヲ

ハハノニ、一ニ於テ述ベタリ然レモ其義
理甚タ幽微ニシテ、諸君ノ之ヲ解スルニ困倦セ
ラレシトテ、恐ル、ガ故ニ其要ヲ舉ゲン、氏ハ此
篇ニ於テ、理一ハ分殊ヲ離レテ思惟スベカラズ、
分殊ハ亦理一ヲ離レテ思惟スベカラズトノ意
ヲ述ベ、次デエリア學派ニテ理一分殊ノ對比ヲ
覺知セシガ、氏ハ觀念ヲ理一即チ實在トシ、現象
世界ヲ以テ之ニ反スル分殊即チ無有トス、之ヲ
要スルニ、現象世界ハ觀念世界ニ對シテハ無有
ニ過ギズ、而シテ觀念ハ其中ニ表像ナキニアラ

ザル、總テ表像中ニ於テ實在トスベキモノハ
觀念ノミト謂フベク、且ツ現象世界ハ其中ニ現
ハル、觀念世界ニヨリテ存スト謂フベキナリ、
第六十四節、既ニプラトト氏ガ實在ト無有ト
ヲ對比トシテ兩者伴存スルモノナリトシ、次デ
觀念ハ實在ニシテ現象世界ハ無有ナルト并ニ
現象世界ノ觀念世界ニヨリテ存スルトニ論及
セリ、プラトト氏ノ觀念論ハ大意ヲ述ベシ、蓋シ
プラトトト氏ハ一般ノ名辭ハ特殊ノ名辭ヲ離レ
テ存在スルモノナリトシ、之ヲ觀念ト名ツケタ

レハ氏ハ實體論者(リヤリスト)ナリ、觀念論者(ア
イヂヤリスト)ニ似タレ、氏、觀念論者ニアラザル
ナリ、氏又オモヘラク、抽象的ノ人ハ具象的ノ人
ト同ジク存在ス、而シテ具象的ノ人ハ抽象的ノ
人ノ意ヲ分受スルニヨリテ之ヲ人トスルノミ
ト、實ニ吾人ハ大類ノ概念ヲ有ス、故ニ佐藤、安井、
齋藤、鹽谷等ノ如キ特殊ノ人ヲ離レテ、別ニ單ニ
人トイフ概念ヲ生ズルコトヲ得、果シテ然ラバ、此
ノ如キ概念ハ如何ナル處ヨリ得來ルカ、抑、吾人
ノ經驗ニヨリテ知ル所ハ、佐藤、安井、齋藤、鹽谷等

ノ如キ特殊ノ人トイフニシテ、單ニ人トイフ概念
ハ感覺ニヨリテ得ル所ニアラス、蓋シ特殊ノモ
ノハ特殊ノ智識ヲ得セシムルニ過ギザルガ故
ニ、若シ曾テ石ノ性質ヲ了解シタルコトナケレバ
今此ノ眼前ニアル若干ノ石ニ就テ、此等ハ石ナ
リト一般ノ名辭ヲ以テ之ヲ呼ブコトヲ得ザルベ
シ、之ト同ジク佐藤、安井等ハ人ナリト、一般ノ名
辭ヲ以テ之ヲ呼ブ前ニ、先ヅ凡ソ人タル者ノ性
質ヲ知ラザルベカラス、即チ先ヅ人トイフ概念
ヲ得テ後、特殊ノ人ヲ知ルナリ、然ルニ人トイフ

概念ハ特殊ノ人トハ全ク格別ナルモノニテ、コ
ノ智識ヲ得ルノ本源モ、亦同ジカラズ、然ラバ何
ヲカ其本源トスト問フニ、全ク是レ反省カレフ
レクシヨシナリ、覺官ニアラザルナリ、實體論者
ハ此ノ如ク推論シテ分殊ニ於テ理一ヲ見出ダ
セリ、即チ特殊ノ人ニ普通ナル性質アルヲ見出
ダシ、更ニ又此ノ普通ノ性質ヲ特殊ノ人ノ有ス
ル偶有性(アクシデンツ)ト分離シ、名ヅケテ普通
性(ユニヴェルサル)トイヘリ、是レ吾人ノ大類ト
稱スルモノナリ、然ルニ實體論者ハ普通性ヲ以

テ獨リ存在スルヲ得ルモノトシ、又帝ニ之ヲ以
テ概念トスルソトナラズ、又實體(エシチ)トス
ナリト思惟セリ、プレト氏モ亦此等實體論者
ト同一ノ見ヲ抱キ、夫ノ普通性ヲ概念ト名ヅケ
タリ、故ニプレト氏ノイハユル觀念ハ吾人ノ
イハユル觀念トハ稍、相同ジカラズシテ、本體ヲ
トシテ謂フ、而シテ特殊ノモノハ現象トスル
ナリ、之ヲ要スルニ、プレト氏ハ特殊ノモノハ
變化極リナケレド、唯一般ノ名辭即チ觀念ハ物
ノ本體ニシテ變化ナキナリト思惟セリ、

第六十五節 プレイト氏ノイハキル觀念ハ略前節述ブル所ノ如シト雖モ猶ホ委シク之ヲ解釋スレバ、分殊中ノ理一ト謂フベク、特殊中ノ一般ト謂フベク、又變化中ト不變ト謂フベキナリ、主觀上ヨリ之ヲ言ハバ、觀念ハ智識ノ本源ニシテ先天ヨリ人ニ存スルモノニテ、經驗ニヨリテ得ラルベキモノニアラス、客觀上ヨリ之ヲ言ヘバ、現象世界中ノ不變的原理イハキユナリテブル、プレイト氏ト謂フベク、又全ク空間ニ關係ナキ單純ナル原一(ユニチー)ト謂フベキナリ、

抑、プレイト氏ガ此ノ如キ觀念ノ説ヲ立ツルニ至リシハ如何ナルコトニ因由スルヤト問フニ、アリストイトル氏才モヘタク、プレイト氏ハ科學ヲ起スニハ感覺ノ外別ニ不變性ヲ有スルモノナカルベカラズ、何トナレバ變化極リナキ者ノ科學ハ到底構造スベカラザレバナリト思惟シ、遂ニ觀念ノ説ヲ立ツルニ至レリト、乃チプレイト氏ハ科學ハ變化セザルモノナケレバ構造スベカラズ、然ラバ變化セザルモノアリヤ、アラバソレハ如何ナルモノカト、此ノ如ク推論シ、遂ニ

觀念ノ實體ニシテ、總テ智識ハ此ニ由ルトイ
フコヲ知ルニ至レリト知ルベシ、
プレーイト氏ハ觀念世界ト現象世界トノ關係ヲ
充分ニ解明セズシテ、唯、觀念ハ模範ニシテ事物
ハ其寫影ナリ、然レニ混雜シタル寫影ニ過ギズ、
而シテ現象ハ全ク觀念ニ依從スルモノトス、シ
ユウゲレル氏曰ク、プレーイト氏ノ哲學ハ二元論
ニ反シテ力爭スレニ成效ヲ奏スル能ハザルモ
ノナリト、蓋シ泛論ニアラザルナリ、
第六十六節、プレーイト氏ハ觀念ニ種々ノ程度

アルモノトシ、而シテ最上ノ觀念ヲ善ノ觀念ト
ス、譬ヘバ、現象世界ニ於テ猶ホ太陽ガ智識并ニ
生命ノ原因ニシテ、人ノ目ヲシテ物ヲ視ルベカ
ラシム、且ツ物ヲシテ生長増殖セシムルガゴト
久、觀念世界ニ於テ善ハ實在并ニ科學ノ本源ナ
リ、即チ眞理并ニ智識ノ根本ナリ、又太陽ガ光線
及ビ目ヨリ貴キガゴト久、善ハ實在及ビ科學ヨ
リ貴シト、プレーイト氏ハ此ノ如ク思惟セリ、然レ
ニ氏ハ如何様ニシテ他ノ觀念ヲ善ノ觀念ヨリ
得來ルカヲ辨明セズ、又氏ハ善ノ觀念ト神トヲ

以テ同一ナリトスレ、其意太夕明瞭ナラズ、左
レル氏ガ善ノ觀念ハ期成原因(エッセシエント、カ
ウズトナスベカラザルガ故ニ、之ヲ以テ神ト同
一視スベカラザルトヲ論ズルハ、亦至當ナリト
謂フベキナリ、

第六十七節 プレート氏ハ萬物ヲ以テ不合理
ナル感覺ニ屬ストセシガ故ニ、倫理若クハ辨證
ヲ究察スルガ如キ熱心ヲ以テ物理ヲ究察セザ
リシノミナラズ、實ニ氏ガ物理上ニ注意セシハ
晩年ハ「ナリト云フ、又氏ガ物理上ノ說ハ會話

篇中ニモ多ク見當ラズ、唯「チミオ」篇ニ於テハ
頗ル物理上ニ渉ル所アリ、其說ニ天地開闢ノ先
キニ當テ造物主(デミオホルゴス)アリ、之ヲ動作并
ニ思慮ノ本トス、而シテ一方ニハ永世ノ模範ト
ル不動ノ觀念世界アリ、又一方ニハ渾沌トシテ
變化極リナキ大塊アリ、テ有體世界ヲ發表スハ
キ素質ヲ含有セリ、造物主乃チコノ兩者ヲ萬有
精神ニ混合ス、然ルニ萬有精神ハ元ト秩序ヲ生
ズルノ性アルモノユヘコレヨリ有體世界ハ其
形ヲ成スニ至ルトス、然レ氏其言頗ル怪誕、信シ

難キ者アリ、但其世界ヲ以テ道理ノ成果及ビ寫影トシ、秩序和合并ニ美麗ヲ併セ有スル有機體トシ、又善ノ成形トスルガ如キハ、哲學上ニ關係スル所少シトセザルナリ。各自ノ精神モ、萬有精神ト同一ノ性質ヲ有スルモノニテ、又倫理的發動ノ基址トモナルナリ、抑精神ハ不滅ノモノニテ、又神聖ナル性質ヲ帶ブルモノナリ、然レモ其身體ニ合スルヤ忽チ身體ノ動作并ニ變化ヲ分受シ、隨テ又合死的ノ性ヲ取ル、是ヲ以テ身體ニ合スルノ精神ハ其本來

有スル所ノ神聖ナル性質ヲ純然保存スルコト能ハズシテ、天ヨリ地ニ落ち、神ノ地位ヨリ人ノ地位ニ降ル、故ニ各自ノ精神ハ上等ノ性ト下等ノ性ト競争スルコトアルヲ免レズ、即チ精神ハ身體ヲ抑制セントシ、身體ハ精神ヲ抑制セントス、此ノ如クニシテ純淨ナル精神モ感覺ノ爲メニ汚セラル、ナリ、故ニプレートト氏ハ精神ヲ二種ノ成分ニ分チテ、一ハ神聖ニシテ合理的ノモノトシ、一ハ合死的ニシテ且ツ不合理のモノトシ、而シテ又更ニ剛氣(シオス)ヲ以テ兩者ノ中間

ニ立ツモノトス、之ヲ要スルニ、ブレイト氏ノ説ニテハ、精神ハ本來神聖ナルモノナレ、凡ソ身體ニ合スルキハ情欲ノ爲メニ染汚セラル、然レ凡多少本來ノ性ヲ記憶スルヲ以テ高尚ナル觀念世界ニ銳進セントスルノ傾向アルナリトノ意ナリ、

第六十八節　ブレイト氏ノ倫理學ハ全ク觀念論ヲ實際ニ應用スルニ過ギズ、而シテ其要ハ最上ノ善ヲ確定シ之ヲ以テ意志并ニ行爲ノ目途トセントスルニアリ、蓋シ氏ノ道德ノ説ハ、此主

義ニ本テ政治ノ説ハ又道德ノ説ニ本テ起ルナリ、

最上ノ善ハ感覺世界ニ存スルモノニアラズ、但理想世界ニ向テ上進ス、之ヲ最上ノ善トス、實ニ精神ノ當ニナスベキ所ハ、感覺ヲ離レ、身體ノ抑制ヲ脱シ、純淨端正ニシテ神ノ如クナルニアリ、而シテ又之ヲナスノ法ハ、感覺上ノ想像ヲ休メ、肉欲ヲ絶テ、思想ノ域ニ入り、真理ヲ認識シ、哲學ニ通ズルニアリ、蓋シブレイト氏ハソクテチー

ス氏ト同ジク哲學ヲ以テ單ニ理論上ニ限ルモ

人トセシテ精神ヲシテ一旦忘レタル理想世
界ノ一ヲ回想シ、以テ其本來ノ状態ニ復歸セシ
ムルモノトシ、精神ハ亦哲學ニヨリテ感覺ヲ離
レテ清淨無垢トナリ、固有ノ性ヲ復獲シ、物體ノ
爲メニ奪ハレタル自由并ニ平和ヲモ再取スル
ヲ得ルモノトス、ブレイト氏ノ此說頗ル支那哲
學者ノ說ト相類スルモアリ、張子曰ク形而後
有氣質之性、善及元則天地之性有焉、正蒙誠明篇
ト、此ニ氣質ノ性ト天地ノ性トヲ分ツハブレイ
ト氏ガ精神ヲ二種ノ成分ニ分ツト相類ス、又莊

子繕性篇ニ「繕性於俗、學以求復其初」ト云ヒ「民始
惑亂、無以反其性情而復其初」ト云ヒ、淮南子淑真
訓ニ「聖人之學也、欲以反性於初、而游心於虛也」ト
云フガ如キ、并ニ李習之ガ復性書ニ「情之動靜弗
息、則弗能復其性、而燭天地、爲不極之明」ト云ヒ、朱
子ガ大學ノ注ニ「本體之明、則有未嘗息者」ト云ヒ、
論語ノ注ニ「明善而復其初」ト云フノ類、未ダ全ク
ブレイト氏ノ說ニ符合セズト雖モ、亦頗ル之ニ
類スルモノアリト謂フベシ、

ブレイト氏ガ道德ノ說ヲ立ツルヤ、全クツクラ

チーヌ氏ニ本キ、徳ハ智識ニ依從スルヲ以テ教
フベシトセリ、但、プレート氏ハソクラチーヌ氏
ノ如ク、徳ハ一ナリトハ斷言セズ、然レモ總テ徳
ハ一ニ歸スルモノナリト思惟スルヲ以テ之ヲ
觀レバ、亦必ズシモソクラチーヌ氏ニ異ナルニ
モアラザルナリ、又プレート氏ハ當時流行ノ說
ニ從ヒ、徳ヲ分チテ四種トス、曰ク、智識ウキストム
曰ク、剛氣コトレチ、曰ク、節制テムペラシス、曰ク、
正義シヨスチーヌ、是レナリ、就中正義ハ他ノ三
種ノ徳ヲ統一スルモノニテ、帝ニ各自ノ間ニ限

ルモノニアラスシテ、實ニ社會成立ノ基址タル
ベキモノナリ、

第六十九節 プレート氏ノ政治ハ全ク理想ニ
出デ、到底實行シ難キ者アリト雖モ、氏モ亦必
ズシモ此ニ達スベシトシタルニアラス、但、當ニ
此ニ達セントスベキナリトセルノミ、今茲ニ氏
ノ意ヲ述ベンニ、蓋シ氏オモヘラク、個々ノ人ハ
社會一般ニ從屬スベシ、即チ一己ノ私心ヲ捨テ
、國家ノ福祉ヲ圖ルベシ、而シテ政府ハ世ノ感
覺ニ關スルヲハ盡ク之ヲ禁ジ、全ク智識ノ一方

二歸セシムベキナリ、此ノ如クニシテ公衆ヲ德ニ進メ、國家ノ一ニ注意セシムルヲ得バ、一己ノ私心ハ地ヲ掃フニ至ラン、抑、各自ノ感覺ハ甚ダ勢力アルモノユヘ、之ヲ制スルニハ律令ニヨリテ私心ヲ撲滅シテ公衆ニ從ハシメ、喜樂悲哀ヨリ以テ視聽進退ニ至ルマデ皆俱ニ之ヲ爲サシメ、私産私家ヲ有セシムベカラズ(即チ什器モ婦人モ共有セシムベシト)、其私産私家ヲ有セシムベカラズトノ說ハ、今日ニアリテハ固ヨリ實行シ難キ所ナリ、然レモ其私心ヲ退ケテ國家ノ爲

メニカヲ盡サシメントスルガ如キハ、如何ナル時ニアリテモ、如何ナル處ニアリテモ、讚美セラ、ル、所ナルベシ、

第七十節 希臘ノ哲學ハプレート氏ニ至テ始メテ體系ヲナセリ、抑、氏ノ哲學ハ高尚ナル思辨ノ初メナリ、又模範ナリト稱スベキモノナリ、蓋シ其學ソクラテース氏ニ淵源スト雖モ、大ニ之ヲ擴充シ、著キ進歩ヲナセルモノト謂ハザルヲ得ズ、然レモプレート氏ノ哲學ハ觀念ノ一偏ニ傾向スルノ弊ナキ能ハズ、是レアリストートル

氏ガブレノ下氏ノ觀念論ヲ駁シ、更ニ實體的ノ
 哲學ヲ構成シタル所以ナリ、
 西洋哲學講義卷之三 終

明治十六年四月二十七日版權免許

講述并
 出版人

福岡縣平民

井上哲次郎

東京麹町區富士見町
 五丁目六番地

發兌人

東京府平民

阪上 半七

東京日本橋區吳服町
 十二番地

轉書

弘通書肆

大坂

梅原龜七

七

同

岡島真七

七

西京

村上勘兵衛

七

同

大黒屋太郎右衛門

名護屋

片野東四郎

東京

北島茂兵衛

同

稲田佐兵衛

同

丸家善七

同

北澤伊八

同

吉川半七

陽曆十六年四月二十七日

